



福島支部会報 38号

日本山岳会福島支部

(令和4年4月～6月の活動)

令和4年(2022年) 7月15日発行
公益社団法人日本山岳会福島支部
支部長 渡部展雄
事務局 〒960-8133 福島市南向台3丁目13-9
佐久間 隆夫 気付
電話: 024-521-9561
携帯: 090-2959-4863

令和4年度支部総会の開催



支部総会開催状況

4月9日(土)福島市民会館において令和4年度支部総会を開催。2期4年にわたり支部長を勤められた佐藤一夫氏からバトンを受け継ぎ、新支部長に渡部展雄、副支部長菊池道彦(再任)、新事務局長に佐久間隆夫を選出。福島支部今後の課題は、組織の若返り特に若手会員拡大と支部活性化が急務であり、さらにJAC創立120周年記念事業「山岳古道調査」に取り組むことを確認した。

支部活動報告 (2022年4月～6月)

公益事業報告

令和4年度支部公益活動計画のうち第一4半期(4～6月)に実施予定の「5月フリークライミング教室(一般公募)」については支部三役で協議の結果、新型コロナウイルス感染の収束が見えず延期とした。さらに、「8.11 山の日親子登山」についてもコロナ禍の影響を勘案し、さらに共催団体の福島民報社と協議のうえ今年度は開催を見送ることとします。

山岳古道調査～新年度4～6月

福島支部が最終的に調査担当する山岳古道調査は、前年度4か所①八十里越 ②六十里越 ③沼田街道 ④大峠について調査開始した。さらに今年度は5か所 ⑤太閤道(勢至堂峠) ⑥旧越後街道 ⑦飯豊山参詣道 ⑧万世大路 ⑨山王峠が追加される見通しとなった。本調査は令和6年度までに調査を終了する計画で進めており、支部の総力を上げて完遂すべく各位の協力を切にお願いするものです。

1 太閤道(勢至堂峠)現地調査～4名参加

5月10日(火)10:00から郡山市湖南町御代居住の金田榮氏(史談会・太閤道=勢至堂峠を守る会代表)宅を訪問。金田氏は、長年、地元史跡の調査と保存活動に取組み、支部からの協力を要請に快く応じてくれた。勢至堂峠(太閤道)については、氏の活動が認められ、文化庁の「歴史の道百選」に追加



金田氏が自宅にて資料を許に説明
左から金田氏と説明を受ける、菊池、渡部、大島

選定された経緯がある。今回は第一回目の調査であったが、金田氏の積極的な協力により丸一日をかけて古道の概要把握と現地踏査を行うことができた。

太閤道とは、天正18年(1590年)小田原城の戦いで時の北条氏政を打ち破り事実上天下人となった秀吉が、なお奥州諸大名の恭順を目的として白河から郡山・湖南～会津若松～南会津～日光まで3万人の軍勢を引き連れ通った古道を指す。秀吉は奥州仕置に先立ち、伊達政宗に道幅三間の拡幅工事を命じ、勢至堂峠、黒森峠、背炙峠を経て蒲生氏郷の黒川(会津若松)城に凱旋したと言われている。



勢至堂峠湖南町入口の道標



湖南町御代の一里塚

2 八十里越(天保古道)現地調査～6名参加

6月11日(土)午前4時現地集合で「八十里越・天保古道」現地調査実施。昨年10月、第一日目「明治新道」、第二日目「天保古道」の調査に続き残雪期を狙って入山した。



入山前、左から渡部、長谷部、渡邊(尋)、(鈴木嘉) 幕田、撮影者佐久間

天保古道に詳しい地元只見町の長谷部忠夫会員と鈴木嘉律雄友会員が案内役となり、幕田(芳)、渡邊(尋)の4人が「小三本沢(浅草岳登山道との分岐)」から先について踏査開始。小三本沢を渡渉した地点から天保古道となり、藪漕ぎと残雪急登の連続であった。正午を行動期限として行き着けるところ迄の目標で調査を進めたが、新潟県境「木の根峠」の手前エスケープルートを通り、17:00出発地の浅草岳登山口に下山、調査終了。



天保古道の石組み遺構



藪漕ぎの状況



小三本沢の渡渉 雪解け水が

天保古道の調査は、この日までに約 70%終了したことになるが、残り未調査部分は新潟県境の険しい藪山であり今秋の第3回目の踏査入山で完遂させたい。

(八十里越明治新道は昨秋の調査入山でほぼ終了)

3 会津中街道(大峠)下野街道の現地調査

「八十里越天保古道」調査翌日の6月12日(日)、渡部、佐久間、幕田、渡邊(尋)の4名は前夜の宿泊先(只見町民宿「山響・ヤマビヨ」)を出発、下郷町の佐藤淳一宅を訪問。今年9月計画の「大峠現地調査」の協力要請を行った。

大峠については昨年9月、下郷町役場観光課長の同道を得、現地山岳ガイドの案内で6割部分を調査実施しており、今秋には調査完遂させる方針。この日訪れた佐藤淳一氏は、「大峠古道ルートは完全に把握した。この秋には栃木県守る会、JAC 栃木支部と合同の実査をする。福島支部もぜひ参加を!」との申し入れがあり、今後日程を詰め実施する。

この日午後からは「会津西街道」のうち中山峠、大内宿、市野峠を実査。会津西街道は、前記1の太閤道につながり、400年前奥州仕置きを終えた豊臣秀吉が、150年前イザベラバードが通行している。



旧中山峠大樺(樹齢950年)



市野峠頂上の看板

4 旧越後街道(東松峠、車峠など)現地調査

6月の月例山行「雄国沼登山(6/27参加者5名)」は、ラピスパ猪苗代現地集合で計画したが、線状降水帯の直撃でこれを取りやめ、急きょ「旧越後街道調査」に変更実施した。



ラピスパに集合した江花、竹永、渡部、幕田、佐久間会員

最初の調査地点は、沼田街道との分岐「坂下町気多の宮」次に「東松峠」～「車峠」の場所概要の把握、さらに宿駅での聞き取りを実施。



旧越後街道概略図 が福島管内

「気多の宮(会津坂下町)」からは西に沼田街道、北に新潟へと向かう東松峠、車峠方面、東に会津若松方面への追分の要衝となつて



気多の宮道



東松峠入口



軽沢宿駅鈴木方

いる。旧越後街道は気多宮を下って只見川とぶつかり、川には平底舟を連ねた渡しがあり人々は交易したらしい。

東松峠を越え西会津町側へ下った「軽沢集落」の鈴木宅に立ち寄り古道調査の趣旨を説明、88歳のご婦人(画像左)がこれに快く応じてくれ、さらにご婦人の長男茂雄氏は会津坂下町教育長要職に在り、今後の協力を申し出てくれた。～感謝、感謝



街道沿い岩壁に掘られた胃神社



車峠入口の標柱

5 飯豊山参詣道(山都・一ノ木・川入)現地調査

飯豊山参詣道(山都町・川入地区～飯豊本山神社)については福島支部が行うか否か結論は先延べとなっているものの、6月30日(木)実査を兼ね地域住民への広報と協力要請を行った。～渡部支部長、佐久間事務局長の2名で現地入り

09:30、川入で唯一現存する民宿「高見台」主人(農作業中)を皮切りに、一ノ木集落有識者「高橋周」宅、さらに山都町NPO法人「民俗芸能保存会」の小澤弘道氏宅を訪問、趣旨説明の結果いずれも全面的バックアップを約束してくれた。



正面民宿「高見台」 右が登山口駐車場への道

川入唯一の「民宿高見台」ご主人は元吾妻小舎管理人高橋豊明氏の応援を得て、畑の刈払い作業中、作業の手を休め、飯豊山参詣ルートや冬山コースのルートを説明してくれました



6 勢至堂地区説明会と太閤道(背灸峠)現地調査

7月3日(日)08:00から勢至堂地区住民に対する説明を実施。これは、6月13日に福島支部が行った須賀川市への協力要請について「太閤道近くの殿様清水に嘗て大勢の人が押し掛け村の安寧が乱された。」とする声が勢至堂地区住民から市側に寄せられており、今回市側の要請で地区に対する直接話し合いを行ったもの。～渡部、大島が現地入り

勢至堂地区(12世帯)の代表で森林組合長との話し合いの結

果、古道企画に概ね納得した旨を表明。その後地区代表者が支部、市担当者を伴って地区内の遺跡・遺構等を案内説明し1時間後に三者の協議を終えた。

渡部はその足で会津若松市湊町の郷土史家宅を訪問、それまで把握できなかった「背炙峠」の旧道を探し当て、合わせて今後の協力も得ることが出来た。



勢至堂地区の旧小学校跡に建つ石塔など

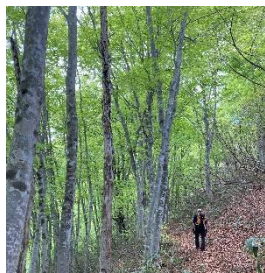


会津若松市湊町からの背炙峠(太閤道)入口

月例山行報告

5月4日「会津目指岳」登山

4月27日(月)に予定した「目指岳(標高650.3m)」登山は諸般の事情で5月4日にずれ込んで実施。会津若松大竹幹衛会員おすすめの山で、佐藤一夫顧問と佐久間事務局長が参加。西会津町道の駅から山頂往復約4時間を要する「隠れた名峰」で、会越国境の山特有の岩と花、加えて山頂からは、残雪を抱く飯豊連峰、磐梯山、会越の谷川岳と言われる御神楽岳など名だたる会津の山々が一望でき、初夏の一日を楽しむことができた。～佐久間隆夫記



6月18日(土)「田代山」登山

06:00 磐越道・磐梯熱海 IC でいわきから参加の紅一点鈴木睦友会員と合流。08:40 湯ノ花温泉猿倉登山口から4名で登山開始。この日は土曜日とあって駐車場は県外ナンバーが目立った。山頂まで約2時間。田代山初登山の高麗、鈴木睦両氏が「別天地」と感動していた。



登山道のヤシオツツジ



山頂からは会津駒ヶ岳の雄姿が

花の景色は「福島支部ブログ」で閲覧ください

個人山行紹介

会員個人山行の詳細は「支部ブログ」に載せました。ここでは日付と抜粋画像1枚のみ掲載します。

- ① 5月9日 吾妻山登山
～佐久間、幕田会員 残雪の一切経山を楽しむ
- ② 6月4、5日大峠・三斗小屋温泉
～小林正則友会員親子 「三斗小屋温泉・煙草屋旅館」
- ③ 6月4日 尾瀬
～友会員氏家光正 すぐれない体調を押しての尾瀬
- ④ 6月7日尾瀬
～佐久間事務局長、幕田 雨に降られて2日間の尾瀬
- ⑤ 6月29日吾妻・鎌沼 姥ヶ原
～佐久間事務局長 初夏の花々を楽しむ



1 一切経と五色沼



2 煙草屋旅館の夕日



4 大江湿原 三本カラマツと尾瀬沼



3 朝霧の至仏山



5 鎌沼とワタスゲ

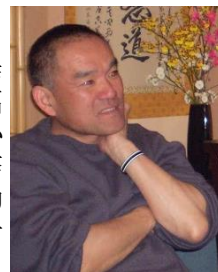
事務局からのお知らせ

1 山岳古道120選決定の遅れ

日本山岳会創立120周年記念事業「山岳古道120選」については最終決定が7月下旬にずれ込む予定です。本部PTが各支部と調整中で、福島支部は9古道の調査を継続します。

2 新入会員の紹介

4月20日付で入会が承認された三浦幸浩さん(62歳)を紹介します。三浦さんは福島市在住で、2年前に公務員を退職されてから現在は福島市シルバー人材センター勤務中です。若いころから飯豊山を中心に活動され、遭難者救助のプロとしても今後の活躍が期待されます。



3 会員訃報

南会津田島在住の小滝清次郎永年会員(95歳)は、5月11日逝去されました。心からご冥福をお祈りします。氏は「JAC分水嶺登山」に精力的に参加するなど、福島県会津地方の山々を知り尽くした方でした。



小滝会員のこれまでの活動紹介
会員番号: 2,561 95歳
会員歴 75年 (1983年入会)
南会津町田島字後原甲 3,635

昭和22(1,947)年に当時越後支部長藤島玄氏の紹介で同支部に入会。その後福島支部設立を機に移籍、日本山岳会の黎明期を支えられました。

J A C 福島支部アーカイブス

「墜ちるなら富山側へ」。山男たちにひそかに語られてきた言葉。27年前の平成6年9月下旬、谷口隊長率いる富山県警山岳警備隊の活動拠点立山で開催の「山岳遭難救助訓練」に参加した体験記「その3」です。 渡部展雄 記

右は称名川を遡った「雑穀谷岩場」での訓練風景。滑落者をウインチで下ろす救助方法 →



○隊員 巡查 園川仲哉(29歳)

山岳警備隊になるため、九州福岡から出てきた人。若くて粒揃いの3班を指導。訓練後半、班員全員を剣岳・源次郎尾根のとあるテラス(岩棚)でのビバークさせる計画を立て出発したが園川隊員の家族に急病者が出て、結局中止となった。ただし、別の山頂でその日の夜9時ころヘッドランプをつけ、暗闇の中に消えて行った。翌日、帰隊した班員をひやかしたところ、「寒くて眠れなかった。でも星空の美しさは素晴らしかったよ」との答えが返ってきた。園川隊員自身、どんな悪天候でも耐えられる装備を用意するようにと指示。この中でシム ラフだけは絶対持参させなかった。遭難救助現場の厳しさを体験させてやろうとしたのだと思っている。

○隊員 巡查 稲葉英樹(30歳)

早稲田大学山岳部出身。しばらくの間、室堂周辺の山小屋でフリーター暮らし。平成2年、谷口隊長にひろってもらって富山県警に入ったとは本人の言。この年(平成7年)6月にヒマラヤ八千m峰「ガッシャーブルム富山県登攀」の隊員に選ばれ、約2か月間海外遠征、登頂に成功している。

その体験談を課外講習の時間に話してくれた。日本の山では絶対的な自信を持つ登山家も、海外、とくにヒマラヤ遠征では馴れない食事と水に悩まされ、必ず下痢をひき起こすという。山に絶対的な自信があったはずの稲葉隊員自身、歩けなくなったとのこと。その一方で荷揚げのために雇った現地ポーターは重い荷を背負い、普通の足取りで苦もなく、日本人隊員を尻目に上へ上へと登りつめていったという。

登頂に成功し帰国の途についたとき、「シエルパはなぜあのように強いのか」について話し合い、いろんな意見が出た中での結論は、「現代人の足は退化してしまった」と決めつける以外理由を見つけないことができなかったということだ。(その後稲葉さんは富山県警を退職、山岳ガイドの道を選ぶも滑落事故で負傷、再起を図っているとか。)

○長野県警山岳救助隊から2名(宮崎茂男、鶴田将仁)

長野県警山岳救助隊から宮崎茂男分隊長と鶴田将仁隊員が講師派遣され、5班と6班を担当指導した。長野県警でも富山県警に先んじて、「山岳遭難救助隊パトロール日記」という本を出版している。今から20年も前になると思うが、やはり、穂高岳や槍ヶ岳など北アルプスでの血のにじむ救助活動やエピソードを綴った本で、涙と笑いを誘うものであった。長野県警救助隊の活動と伝統は、富山県警のそれに優るとも劣らないものがあり、お二人の優秀さは推して知るべし。

以上のように、今回我々の指導を担当した隊員(教官)は、それぞれ異なった能力や性格の持ち主であった。それでいてひとたびチームを組んで救助現場に出動した場合、すごい力を発揮するという。それが谷口隊長の作り上げたチームの姿なのだ。ピッケルを持ったお巡りさんはこのほかに25人もいる。

訓練日記

研修初日、警察庁地域課長補佐、富山県警地域課長を迎え開講式。続いて谷口隊長が「山岳遭難救助活動の実態」に

いて講話されたが、隊の歴史そのものである同隊長の自信に満ちた語り口には鬼気迫るものがあり、研修生一同これから先どうなるやらの思いにかられてしまった。特に、厳冬期の剣岳山頂付近における救助活動を記録したビデオ(地元TV局がヘリで実際の現場を撮影したもの)を見せられ”ど肝”を抜かされた。

このビデオからは、現場の生々しい迫力、死と隣り合わせの救出劇で、富山県警のすごさを見せつけられた。谷口隊長が講話で「救助作業の最後はやはり人の力、体力・気力以外にない。訓練で泣き、実戦で笑う。」と強調したそのとおりの映像であり、思わず年齢のことも忘れ闘志がわいてくるのがわかった。

研修第1日目の午後から実技訓練が開始されるため、早めの昼食を済ませ待機していたところ、「1班と2班は登攀用装備を持ち、雑穀谷に行く」と指示された。そこはまさしく岩壁訓練にうってつけのグレンド。20、30、50、百メートルとそれぞれ4つの絶壁が連なり、しかも適当な間隔でそびえ立っていた。

岩壁にはハーケンやボルトが打ち込まれ、ここが富山県警山岳警備隊の訓練場所であることを物語っていた。

△9月26日(月)快晴 於雑穀谷岩場

2人一組で岩壁登攀訓練。ザイルワーク、結束方法、支点、ビレー(確保)など基本訓練の後、フリークライミング実施。その後、エイト環を使って懸垂下降の繰り返し。注意点は①ザイルは必ず毎回全部点検した後に使う ②アンカーはボルトなら三本以上とし、必ずスリング(輪に結んだ捨て縄)を通し負荷を平均にする ③登攀中、ハーケン、ボルトに足をかけない ④懸垂下降は岩壁をゆっくり歩くような気持で、絶対跳ばない、の四点。救助活動であることを考えれば、二重遭難を招くような行為は絶対してはならないのだ。午後5時からは負傷者を背負い歩く訓練伝達訓練でかなり参った。夜は谷口隊長が主催する懇親会があり、午後10時就寝。精神的に疲れた一日。

(当時富山県警では『ザイル』と呼称、文中にそのまま引用)

△9月27日(火)

朝から雨やまず。午前7時30分バスで雑穀谷へ。この日は、岩壁の途中に遭難者がいるとの想定で、これの下降・引き上げ救助訓練を行う。この訓練で最も大切なのは支点(アンカー)の取り方とチームワーク。支点が崩壊すれば二重遭難(死)は必至。救助者を背負って降下し、登る訓練員。これを傍らでサポートする訓練員、ザイルを繰り出し、また引っ張り上げる訓練員、さらに百メートル以上も引き上げるにはナイロンザイルではなく6ミリワイヤーとウインチを使用するが、この巻き上げをする訓練員など、持ち場、持ち場で百パーセントの力が要求される。すべて人力で行うため体力の消耗も激しい。高所のため恐怖心もあるが、支点が万全であること、ザイルや体に着けた安全ベルト(ハーネス)、スリング、カラビナなど登攀用品と救助チームの信頼感があれば自信を持って行動できることを確信。



この日の午前中、NHK・TVスタッフが訓練現場を取材、遭難?者を背負って下りたところでインタビューを受けた。その様子が夕方のニュースで全国放映されたとか誰かが後日語っていた。この日は朝から一日中この岸壁でアプミを使ってのオーバーハンク乗っ越しやストレッチャーを使っての遭難者の下降技術を学んだ。休憩したのはお昼休みの1時間だけで谷口隊長看のもと訓練に没頭した。

夕食後午後7時から稲葉隊員の海外遠征体験(8千m峰ガッシャーブルム登攀)の講話。9時終了、11時就寝。

～ 以下次号～